

コラム

「日本の将来の稼ぎ手は何か」

客員研究員 新井 光雄*

新年である。「下手な考えは休むにいたり」は承知でも、あれこれと考えざるを得ない。そのひとつは、これからの日本の稼ぎ手はどこにあるかという問題である。産業構造の専門家に聞きたいところだが、多分、明確な回答はないのだろう。逆に心配、懸念が続出ということになるのではないだろうか。目下の政権は「環境技術」を前面に出すが、構想としては分るが確信は持てない。スーパーコンピューターを「二位であってはどのようにして駄目なのですか」と一度はあっさり否定してしまうような政権を信頼することは簡単にはできない。競争で初めから二位を狙うようでは、二位もおぼつかないだろうと思う。

しかし、まじめな話、これからの日本は何で食べていくかは今後、ボディブローのように効いてくるような気がする。思いつくままに振り返るとその稼ぎ手は、「歴史的」に繊維、造船、鉄、車などなどが思いつく。鉄、車はその「象徴」の残滓がまだまだあることも確かだが、一方に翳りもなしとしない。車は、次世代の登場で電気自動車の動きが示すように国際競争のなかにある。どう展開していくのか読めない。ある専門家に聞いたのだが、電気自動車はプラモデルのようなもの。部品をかき集めて個人でも出来てしまうようなものという。大きく稼ぐという商品ではないというのだ。分りやすく言えば、国際的に儲かる商品ではないというのだ。これまでの自動車の生命はエンジンだけで、電気自動車にはそれが事実上ない。そこで一種のオモチャ化ということらしい。同じオモチャでも品質が問題となる面もあるものと想像するが、その差は余りないらしい。鉄はいうまでもなく国際競争の渦中にある。

どうも次なる輸出の「顔」が見えてこない。正直、時々、大きな不安感に近い感じを抱く。よく言われる「科学技術」もまず抽象的に過ぎるし、第一、それ以前に若い人たちの理科離れは想像を超えるほどに厳しい。一人の天才がそれを埋めるということもあるのだろうが、多分、総力戦なのかと思うから、いるかないか分からない天才に期待することなどできない。天才がどう生まれるのか知らないものの、生み出す基盤は必要なのだろう。その基盤が怪しい。毎年、大学の講義では公立高校の数学の入試問題をやらせてもらう。どんな状態かを知りたいからで、理科離れを体感しようということでも来年度も実施するつもりでいる。しかし、結果は毎年余り変わらない。できない。本当に出来ない。このことはこれまでも指摘してきたが、最近またメディアが「分数の出来ない大学生」などと報道しだした。深刻なのだが、その深刻さを改善に結びつける動きが余り感じられない。空恐ろしい基盤崩壊ではないかと思うのだが、問題が大きすぎて個人でなど到底、関与できるものではない。

となつて多少、将来に絶望的にもなるのだが、現実問題としてエネルギー分野で稼げるのは原子力技術ではないだろうか。そう思い、期待もしている。大胆に言い切ってしまうとこの分野で

* 地球産業文化研究所理事 元読売新聞編集委員

輸出能力を持つのは日本とフランスであるはずだ。単純化しすぎは承知だが、この分野での日本優位はそう間違っていない。現にアメリカ、中国あたりでは着実な成果を上げつつある。ところがどうしたことか迫力に欠ける。どうやら「原子力」のおかれた環境が余りにも複雑で、日本では政治的なリーダーシップが示されていない。口先ではその重要性を言う政治家も、積極的には関与しようとはしないのが現状である。分りやすく言えば、原子力は票にならないどころか、積極関与は逆効果とさえ思われてしまっているように思える。

これでは大統領自らが商売に乗り出しているとも感じられるフランスにかなうはずがなからう。いや、フランスだけではない。最近、韓国がUAEの原子力建設の受注に成功した。

これは衝撃的ニュースだった。そうお隣で静かに原子力に取り組んできた韓国が、である。さしずめ、日本は弟分に出し抜かれたという立場だ。ある原子力関係者は「夜も眠れぬほどに悔しかった」とまで言う。確かにそうだろう。このままでは中国も動き出す可能性さえある。将来のこととは言え、日本は指を銜えてみているだけでいいのだろうか。よくないのは当然なのだが、どこかで、そうならざるを得ないという雰囲気であることは確かだ。いずれ気がつくという流れなのだろうか。むろん、日本の政府が全くなにもしていないということではない。経済産業省を中心に原子力分野の国際展開を検討している。これに対応しての民間サイドの動きも確かにあるにはある。

しかし、商売は議論ではない。こんな状態だから韓国にあっさり抜かれてしまう。韓国は国をあげての対応だ。フランスはいわずもがな同様。それに比べ日本はどうか。言うまでもない不明確さ。むろん、原子力で儲けることもないという意見もある。クリーンエネルギー技術で、ということで、それもむろん結構なのだが、返す刀で原子力技術を否定することもあるまいと思うが、そうになってしまうところがある。こんな混乱が日本の原子力のあり方をゆさぶってしまう。余りにも純情に過ぎないか。

今回の韓国—UAE問題はもう少し真剣に受け止められていい。原子力関係者のくやしさはもっと共感されるべきなのだ。今後の焦点は対ベトナム輸出。フランスなどと熾烈な商戦が展開されていると聞かすが、さてどうなるか。一度、ベトナムの原子力関係者に講演をしたというだけだが、個人的な思いもあって、注目のプロジェクトだと思っている。中東市場もUAE以外に広がってきつつある。

原子力を稼ぎ手の主役に、とまでは言わないが、せめて名脇役程度にはしていいのではないだろうか。そのためには国、役所、原子力メーカー、電気事業者などの一体的な対応が必要になってくるのだろう。それには強力なリーダーシップが不可欠となるのだが、それが目下、見えてきていない。目立つ政策は子育て、医療などばかり。授業料無料化も教育のためというより福祉的視点なのだろう。

こうした単純に言えば「輸出」による原資がいる。その稼ぎ手が必要だ。政治はこうした視点をも国民に訴えるべきだと思う。

その意味でもベトナム・プロジェクトの成否が大きな意味を持つ。ここでまたフランスならまだしも、韓国にまた出し抜かれるとなると、そのインパクトは余りにも大きい。その方がいいという見方は分らないではないが、ちょっと楽天に過ぎる。無責任か。

いずれにしても、今後の稼ぎ手問題は重要極まりないはず。エネルギー問題など、この稼ぎ手がなくなれば、買えないのだから、なくなってしまう。環境問題も同様だろう。原子力技術はひとつの例。稼ぎ手問題を広範な議論の対象に今年は是非してほしい。

お問い合わせ : report@tky.ieej.or.jp